



東北復興日記

まだまだ

▶▶▶ 240



建築家・スレート千軒講
阿部正さん

宮城県石巻市雄勝では明治初期中期、近代化に伴って需要を見いだされた粘板岩の採掘が盛んになりました。これが近隣村に拡大して多くの葺き職人を輩出。国内屈指のスレート産業へと発展しました。

天然スレートを知る人はあまり多くないでしょう。しかし「東京駅の屋根に葺かれていたもの」と言われれば、想像できるのではないのでしょうか。多くの人の印象に残り、東京・丸の内の風景を担ってきた素材のひとつとも言えます。

私たちにはもうひとつ大切な風景があります。宮城県北東部から

家畜が家族同様である農村では、主屋から馬屋うまやにいたるまでスレート葺きに変わり、漁村では塩害対策として外壁もスレートに変わり、いずれも趣向を凝らした意匠で職人たちが腕を競いました。この屋根の下の空間は、養蚕などの生業を安定して営むことを可能にしました。暮らして豊かさを

土着の風景を問う

岩手県南東部に分布する天然スレートの民家群です。水稲地帯の屋敷林に囲まれた玄くろい石屋根がおりなす屋敷構えや、リアス海岸のわずかな浜辺に魚鱗形ぎょりんの玄い石屋根が密集する風景は唯一無二のもの

もたらしたスレート民家は、この地方の真正な風景ですが、東日本大震災の被害や老朽化、離農・離漁などで減少しています。

でしょう。こうした風景がつくられた背景には、この地方で粘板岩(スレート)が産出されることに

五十年後も千軒位のスレート民家を残すために、民家所有者や職人らと「スレート千軒講」というネットワークを立ち上げ、歴史・文化的価値の啓発や、技術の継承に取り組んでいます。昨年は、国指定石盤葺技能者の佐々木信平さんらとスレート葺きの実演会⇒写真や所有者との相談・勉強会を開催し、土着の風景を再考する機会を持ちました。早速、陸前高田市下矢作地区では、まちづくり計画に活用する動きもあり、手応えを感じているところです。



※この連載は、東京のNPO法人JKSKと、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。